平成二十九年　六月三〇日発行
三重大学　日本語学文学第二八号　抜刷

『伊勢大輔集』の和歌改変をめぐる一考察

村口進介

『伊勢大輔集』の和歌改変をめぐる一考察

村口進介

一

『後拾遺集』を代表する女流歌人、伊勢大輔には雑纂、部類という二形式の家集があり、その伝本は次のように大分類される。[1]

・第一類（流布本系）：彰考館文庫蔵本（『私家集大成　中古Ⅱ』「伊勢大輔Ⅰ」、『新編国歌大観　第七巻』の底本）、雑纂形式、総歌数一五〇首。

・第二類（部類本系）：東海大学図書館桃園文庫蔵伝後京極良経筆本（『新編国歌大観　第三巻』の底本）、部類形式、総歌数一七四首。[2]

・第三類：時雨亭文庫蔵定家筆臨模本（『私家集大成　中古Ⅱ』「伊勢大輔Ⅲ」が底本とする書陵部蔵（五〇一・二二六）本の親本）、雑纂形式、総歌数一二七首。

自撰の可能性が高いとされる第一類と第二類の成立事情について、後藤祥子氏は第一類の詞書の人物呼称が「内輪」「身内的」であり、第二類が「流布本の持つ私的贈答を省」くことから、雑纂形式の第一類が「極めて私的なレベルで作成受容されたことを思わせる」のに対し、部類形式の第二類は「部類本という改まった編纂態度からも当然予想される事ながら、極めて公的な姿勢で編まれた集であり、主家関白家に奉献すべく編集されたものではないか」[3]とした。田中登氏は第三類も自撰とみるが、[4]第三類の位置づけについてはなお慎重を期すべき必要もあるかと思われ、[5]また行論の煩瑣を避けるためにも、本稿では第一類と第二類を考察の対象とし、両類間に見られる本文改変について小考する。

第一類17～20歌に、紫式部と伊勢大輔の間で交わされた二組の贈答歌がある。後半の一組で紫式部は氷った雪のついた松を折枝に、人生のはかなさを詠む一首を伊勢大輔に贈る。

【第一類】松に雪のこほりたりしにつけて、同じ人

（19）奥山の松葉にこほる雪よりも我が身世にふる程ぞはかなき

かへし

(20) 消えやすき露の命にくらぶればげにとどこほる松の雪
　　かな

折枝にちなんで両歌は傍線のごとく「こほる」を詠み込む。これを第二類83、84歌では「同じ人、松の雪につけて」と詞書から「こほり」を削除し、傍線部をそれぞれ「かかる」「うらやまれぬる」へ改変する。これは『源氏物語』椎本巻の中の君の詠歌とそれに続く「奥山の松葉につもる雪とだに消えにし人を思はましかば／うらやましくぞまたも降りそふや」（小学館新編全集⑤二〇三～四）を踏まえた改変だとされ、中西智子氏は「贈答歌における「氷る」―「げにとどこほる」の表現的対応を「かかる」―「うらやまれぬる」としたⅡ類本の本文について、後藤氏の指摘に基づいて考えれば、これはⅡ類本を頼通に献上する際、より『源氏物語』の本文を深くふまえた形に整えたためという見方も可能となろうか」と述べる[6]。

このように第一類と第二類の間には、字句の訂正にとどまらない本文の改変が多く見られる[7]。本稿は第一類42～45歌と第二類139～140歌を例に、『伊勢大輔集』における改変の様相の一端を明らかにしようとするものである。

二

第一類42～45歌の本文を示す。

【第一類】男ある人を年ごろ思ひわたりけるに、その人なむものに参りにけると聞きて、かねて嵯峨に行きゐて、木の葉に書きてとらせける、家経

(42) 奥山の木の葉が下に行く水は人こそ知らねすまぬものかは
　　これが返事せざりしなん口惜しかりし、妹の君の語りしかば、かの人に代はりて

(43) 落ちつもる木の葉がくれの忘れ水すむとも見えず絶え間のみして
　　又かへし

(44) 石間ゆく下には通ふ谷水も木の葉をしげみ上ぞつれなき
　　又かへし

(45) 山がくれさのみ木の葉の散りつまば石間の水は音だにもせじ

藤原家経は『後拾遺集』以下に入集、家集も残す歌人で、伊勢大輔とは50～52歌でも贈答を交わし、これらの詞書より関係の親しさが伺われる。引用は、夫ある女に思いを寄せる家経が嵯峨で待ち伏せし42歌を送るも返事がなく、それが残念であっ

たと家経の妹君から聞かされた伊勢大輔がその女に代わって43歌を詠んだことによるやりとりで、家経が「木の葉に書きて」歌を贈ったことから、いずれも「木の葉」を詠み込んだ二組の贈答歌からなる。

42歌は第五句の「すまぬ」に「澄／住まぬ」を掛け、木の葉の下を流れる水のように誰も知りはしないが、あなたと住まないはずはないと詠みかける。上句は『古今六帖』1463歌「奥山の木の葉がくれに行く水の音聞きしより常に忘れず」[8]からの借用であろう。『古今六帖』第三帖「水」の項目はこの歌を含め十五首を収め、実にそのうちの十一首が「山下水」「下がくれ行く水」に忍恋を重ねて詠む。42歌もまたその類型に拠るが、第二句の「木の葉が下」はこれを初出とする。

「秋山の木の下かくり行く水の我こそ益さめ思ほすよりは」（『万葉集』巻二、92）以来、『古今集』『後撰集』の「木がくる」から『拾遺集』『後拾遺集』の「草がくる」へと、勅撰集において「下がくれ行く水」を覆うものの変遷が見られる。『古今六帖』はその両方を含んで過渡的状況を示すが、「木の葉がくれ」は先の『古今六帖』1463歌のほか、同369歌、『後撰集』179歌、『好忠集』306歌に見える程度の、用例数の少ない歌句である。それを家経は「木の葉が下」へと改変することで、「下がくれ行く水」の主想をより明確にした。

それに対し、木の葉の下の水はどうせ忘れ水なのでしょう、こう絶え間がちでは一緒に住むとはとうてい思われませんと切り返す伊勢大輔の43歌は、改変前の「木の葉がくれ」をあえて用いて、『六帖』1463歌をふまえたことへの応答を示す。そのうえで伊勢大輔は「木の葉がくれ」を挟む初句、第三句に趣向を凝らす。「落ちつもる」の用例自体は珍しくなく、初句に置く例もまま見られるが、その多くは「紅葉」「涙」を取り合わせ、「木の葉」を導く例は同時代の『大弐高遠集』71歌、『和泉式部集』610歌以外に見出せない。また第三句の「忘れ水」は『後拾遺集』巻第十三、恋三735歌を勅撰集初例とし、『是則集』39歌を唯一の先行例とする歌ことばであり[9]、43歌の上句は目新しい歌句の組み合せが試みられている。

続く44歌は43歌の第五句「絶え間」からの連想か、「石間の水」を「下水」に仕立て、「葦根はふうきは上こそつれなけれ下はえならず思ふ心を」（『拾遺集』巻第十四、恋四893）を縒りあわせた歌い口で、うわべだけで判断しないでほしいと訴える。それに石間の水の音が消えるように、音信さえ絶えるのではと反発してみせる45歌は、先行歌では多く「桜」「花」「うぐいす」「ほととぎす」といった春季の歌材を導く「山がくれ」を初句に据え、「木の葉」と取り合わす新奇さが看取されるものの、歌意において43歌との径庭はほとんど見られず、展開にも乏しかったためか、第二類はこの44、45の贈答歌を採らない。

三

第一類42、43歌は第二類では次のように改変される。和歌の改変部のみに傍線を施す。

【第二類】男のありける人を、心かけたりけるが、その人なん待つと聞きて、道にゆきあひて木の葉に書きてとらせける

(139) 谷がくれ木の葉が下に行く水は人こそ知らねすまぬものかは

その人に代はりて

(140) 散りつもる木の葉が下の忘れ水すむとも見えず絶え間のみして[10]

第一類後半の贈答歌（44、45歌）が削除されたことは先に触れたが、改変された139、140歌の初句には44歌「石間ゆく下には通ふ谷水も」、45歌「山がくれさのみ木の葉の散りつまば」の痕跡が認められ、それぞれから採られたと思しく、単純な削除とみることはできない。以下で検討するように、この初句の改変が第二類の眼目となっており、改変にいたる思考の軌跡を具体的にたどることのできる興味深い例の一つである。

あらためて第二類に目を向ければ、139歌の初句を「谷がくれ」、140歌の第二句を「木の葉が下」とすることで、第一類における贈答歌の勘所とでも言うべき『古今六帖』1463歌の表現を分有しあう一回的な関係が解消され、先行例のない「木の葉が下」に焦点をあてた形となっている。

第一類と第二類における改変全般を見渡せば、第二類が贈答歌として体裁を整るため語句を揃える例はいくつか見られ、当該贈答歌に類似する例としては次が挙げられる。

【第二類】秋、言ひはじめたりし人の言ひたりし

(161) けぶりこそ立つとも見えね霧まよふ恋にこがるる秋を知らなん

かへし

(162) 霧まよふ秋の空にはことごとに立つとも見えぬ恋のけぶりを

第一類46歌は161歌の「霧まよふ」を「人知れず」とする。第二類の改変は語句の照応性を高めると同時に、先行例としては『賀茂保憲女集』70歌「霧まよふ秋は来にけり遅れじと思ひて草木いまや色づく」があるだけの語句を際立たせる。改変の方向性を139、140歌と同じくし、第二類の傾向の一端がうかがわれよう。

さて、139歌「谷がくれ」の先行例を検すれば、『蜻蛉日記』中巻、夫源高明が左遷され尼となった愛宮を見舞って道綱母が

詠む長歌の一節「谷がくれなる　山水の　つひに流ると　騒ぐまに」はじめ、四例を数えるにすぎない。第一類の45歌の初句「山がくれ」が多く春季の歌材を導いたのに対し、「谷がくれ」はまだ特定の語句とは結びつかない、新味のある歌ことばであったと言える。

つぎに140歌の「散りつもる」については、まず43歌「落ちつもる」の削除について一点触れておきたい。「落ちつもる木の葉」が同時代の二例以外に見られないことは既に述べたが、『伊勢大輔集』には類例がある。

【第一類】院の白川殿におはしますころ、右大殿もおぼすことありげなるに、大宿直に候ひたまふつとめて、木の葉に書きてたまはせたりし

(62) 世の中に吹きよる方もなきものは木の葉ちりぬる木枯らしの風

かへし

(63) 落ちつもるこの山里の木の葉をばかへしの風も吹きかへさなん

伊勢大輔が詠んだ63歌は第二、三句「この山里の木の葉をば」、第四、五句「かへしの風も吹きかへさなん」に同音反復の生かされた、調べの心地よい歌であるが、「右大殿」が贈歌を「木の葉に書き」、「木の葉」を詠み合うあり方は、第一類42～45歌と変わりがない。それが第二類89、90歌では詠歌状況の重複を避けるためか、「院の白川殿におはしましし」ころ、右大将殿おぼすことありて、御宿直したまひて、つとめてたまへりし」と詞書から「木の葉に書きて」を削除し、和歌に大きな改変は加えず収載する。[11] 第二類に「相模が久しくおとせざりしかば、木の葉に書きて」と、伊勢大輔が「木の葉に書」いて贈った「木の葉だに風のたよりにとひくるに人こそ人を忘れはつめれ」(49歌)があることも加味すれば、詠歌状況の諸種への興趣を看取することもできようか。

さて、「落ちつもる」から改変し初句に据えられた「散りつもる」の先行例は十例を数える。多くは「塵つもる」と掛詞にして、「落ちつもる」同様「紅葉」を導くもの(『一条摂政御集』58歌、『道済集』26歌)、「夜床」「枕」を取り合わせたもの(『好忠集』229歌、『和泉式部集』375歌、『伊勢大輔集』第二類72歌)のほかに、「桜／花」と詠まれた例が四首ある。そのうちの二首が『伊勢大輔集』に伊勢大輔との贈答が見える和泉式部、赤染衛門であることはいかにも興味深く(『和泉式部続集』530歌、『赤染衛門集』418歌)、そのような同時代の用例への考量も働いたか、「木の葉」との取り合わせは140歌を初出とする。

このようにして第一類43歌の上句「落ちつもる木の葉がくれの忘れ水」は、42歌から「木の葉が下」を取り込み、初句を「散りつもる」に改変することによって、よりいっそう新奇な表現の組み合せを獲得し、類例をみない「散りつもる木の葉が下の

忘れ水」へと転成を遂げた。

四

『伊勢大輔集』における和歌改変の一様相として本稿では第一類42、43歌と第二類139、140歌の検討から、目新しい語句の使用や先例のない組み合わせを積極的に試みる伊勢大輔の姿勢が、とりわけ第二類において顕著であることを確かめた。

第二類161、162歌にも同様の傾向が見られることは前節のなかで触れたが、いまもう一例挙げておきたい。伊勢大輔が正子内親王絵合に詠出し、『後拾遺集』巻第三・夏176歌に収まる「卯の花の咲けるさかりは白波の龍田の川のゐせきとぞ見る」の各類における様相は、次のとおりである。

【第一類71】卯の花の咲ける垣根は白波の龍田の川のゐぜきとぞ見る

【第二類22】卯の花のにほふあたりは月なみの龍田の川のいぜきとぞ見る[12]

【第三類34】卯の花の咲けるさかりは白波の龍田の川のゐぜきとぞ見る

第三類は『後拾遺集』176歌と異同なく、第一類、第二類に傍線のような改変がみられる。[13]「卯の花」に取り合わされる語句としては、「卯の花の咲ける垣根は陸奥の籬の島の浪かとぞ見る」（『拾遺集』巻第二、夏90歌）、「卯の花の咲けるさかりは山がつの垣根はなれぬ月かとぞ見る」（『嘉言集』41歌）などのように、第一類、第三類の「咲ける」「垣根」「さかり」が一般的であるのに対し、「にほふ」は「卯の花のにほふ皐月の月清みいねず聞けとや鳴くほととぎす」（『家持集』70歌）ほか三例を数えるにすぎない。摂関家への奉献本と目される第二類に施された改変の方向性の一つを、これらの例はもの語っていよう。

このような伊勢大輔の新しい和歌表現への探究は、新風や和歌史の屈折点と評される『後拾遺集』へ向かう時代の気運に呼応するものであったろうが、最後に伊勢大輔が第二類139、140歌で試みた表現の行方を素描して小稿を閉じたい。139、140歌の上句に想を得たかと思われる歌が平安末期、『千載集』に初入集する歌人たちのあいだで、にわかに散見されるようになる。

139歌「谷がくれ木の葉が下に行く水」の表現を用いたものとして、『千五百番歌合』における小侍従の詠歌、「谷がくれ木の葉が下のむもれ水こほればやらん音もせぬかな」（1876）が挙げられる。140歌の「散りつもる木の葉」を冒頭に置く歌には『千載集』巻第五、秋歌下377「散りつもる木の葉も風に誘はれて庭にも秋の暮れにけるかな」（法橋慈弁）はじめ、六条藤家歌人、経家の家集37歌、その弟顕家にも一首あり（『月詣和歌集』923）、そのほかに『隆信集』252歌、『千五百番歌合』1584、1956歌が挙げられる。そして、この時代に摂関、氏長者を務め、六条藤家を

庇護し歌壇も形成した藤原兼実が、女任子（宜秋門院）入内の折の屏風歌に「散りつもる木の葉の下を見ぬ程はまだ氷魚よらぬ瀬瀬の網代木」（『文治六年女御入内和歌』225）を詠む。「散りつもる木の葉の下」の成句を用いた作例は伊勢大輔以来となる。

これは和歌の表現史のささやかな一コマにすぎないながら、このような兼実周辺に見られる第二類歌への注目がいかなる事情によるものか、兼実の歌の師、藤原清輔が示す大中臣家への関心の高さが影響したのか、[14]興味は尽きないものの、その考究はもはや稿者の力が及ぶところではなく、竜頭蛇尾のそしりを逃れぬが、ここで擱筆とする。

＊和歌本文の引用は、『伊勢大輔集』第三類は『私家集大成　中古Ⅱ』（明治書院）、その他の引用および用例の検索は『新編国歌大観CD-ROM版Ver2』（角川書店）により、私に表記を改めた。

【註】

（1）「冷泉家時雨亭文庫蔵平安私家集系統一覧」（『冷泉家時雨亭叢書　平安私家集　十二』朝日新聞社、二〇〇八年）により、久保木哲夫『伊勢大輔集注釈』（私家集注釈叢刊2、貴重本刊行会、一九九二年）で補った。「系統一覧」は第二、三類をさらにA、B系統に分け、三類五系統に分類する。『注釈』は第一類：彰考館本と同系統の三手文庫本を、『私家集大成　中古Ⅱ』「伊勢大輔Ⅱ」は第二類：伝良経筆本と同系統の書陵部蔵（五〇一・五一）本をそれぞれ底本とする。

（2）東海大学蔵本は141歌の部分に欠脱がある。同類の宮内庁書陵部蔵（五〇一・二六〇）本や時雨亭文庫蔵資経本によって欠脱を補えば総歌数は一七五首となる。

（3）後藤祥子「伊勢大輔集覚書」（森本元子編『和歌文学新論』明治書院、一九八二年）。同「家集の虚構の問題」（伊藤博他編『王朝女流文学の新展望』竹林舎、二〇〇三年）に補説がある。

（4）田中登「伊勢大輔集　解題」（『冷泉家時雨亭叢書　平安私家集　四』朝日新聞社、一九九六年）。

（5）第三類B系統に分類される時雨亭文庫蔵定家監督書写本の「解題」（前掲注（4））に、A系統の定家筆臨模本と「歌序は完全に一致していながら」、歌数が三首少なく、両本の間には「都合百箇所以上にもわたる異同が観察され」るとある。

（6）中西智子「紫式部と伊勢大輔の贈答歌における『源氏物語』引用―「作り手」圏内の記憶と連帯―」（『日本文学』六一巻一二号、二〇一二年十二月）。早くは寺本直彦「源氏物語と同時代和歌との交渉」（『源氏物語受容史論考　続編』風間書房、一九八三年）に指摘がある。

（7）石橋幸子「伊勢大輔集　校本と研究」（『香椎潟』16号、一九七〇年九月）が、各類間の異同を一覧で示し、非常に有益。本稿も多大な恩恵を受けた。

（8）『万葉集』巻第十一2711に第二句「木の葉がくれて」、第五句「常忘らえず」として載る。

（9）西田友美「忘れ水の恋歌」（『国語国文学研究』第28号、一九九二年九月）、鈴木宏子「忘れ水」（久保田淳他編『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、一九九九年）。

（10）第三類79、80歌は第二句をともに「木の葉の下」とする。

（11）89、90歌の第四句をそれぞれ「木の葉ふりしく」、「かへしの風の」とする。

（12）『新編国歌大観』は第三句を「白波」とするが、東海大学蔵本の影印により改めた。

（13）上野理氏は第一類が『後拾遺集』の撰集資料となった可能性の高さを指摘し（『後拾遺集前後』笠間書院、一九七六年）、それを踏まえて後藤

祥子氏は「摂関家に収納された部類本とは無縁な所で後拾遺集編纂が行なわれたのは極めて当然の事ながら、編者通俊が部類本の控えを用いず（恐らく初めから作る必要がなかった）、流布本の系統に拠ったらしい所に流布本の内容を作者に最も近いものと見做す親族の評価があらわれているだろう」（前掲注（3）「伊勢大輔集覚書」）と記すが、『後拾遺集』巻第五・秋下349歌、巻第十八・雑四1074歌などは第二類に最も近く、『伊勢大輔集』各類と『後拾遺集』の関係をめぐっては再検討の余地もあろうかと思われる。

（14）芦田耕一「『袋草紙』に見える大中臣家をめぐって―六条藤家と大中臣家―」（『島根大学法文学部紀要文学科編』8巻1号、一九八五年十二月）参照。

［むらぐち　しんすけ　本学教員］